

初めてメカス氏と握手を交わしたときの印象などを語る吉増さん



福生ゆかりの詩人・吉増剛造さんの 『眩暈 VERTIGO』上映で

トークイベント開催

青梅 シネマネコで

福生で育ち、国内外で活躍する詩人・吉増剛造さん(84)が盟友の故ジョナス・メカス氏を悼む姿を追ったドキュメンタリー「眩暈 VERTIGO」(井上春生監督)が先月青梅で上映。その期間中の9月23日と24日、青梅市西分町の映画館シネマネコ(菊池康弘代表)で、吉増剛造さんと井上監督(60)、青梅市在住のキュレーター・井上正行さん(31)のトークイベントが開かれた。(澤村みどり)

両日に登壇した井上監督は「この映画は吉増剛造の言葉で構築された」と語り、ニューヨークでの撮影中に録音した約200時間に及ぶ吉増さんの声のデータを毎日聞き、3か月間にわたる音の編集から入った経緯を紹介。米国の映像作家で詩人のメカス氏の一周忌の2020年1月から始まった撮影は、新型コロナウイルスの時期と重なりマンハッタンでの録音に救急車の音が常に入っていたという。帰国後は新型コロナウイルスの影響で、いつ上映するのかわからず不安になりながらも編集作業を続けた。

ラストのメカス氏が歌うシーンは、吉増さんの部屋の奥に眠っていた30年ほど前のVHSテープの分解掃除をしてカビをとり、専門業者で1か月間かけて再生できるようにしてもらったと明かした。23日に登壇した井上正行さんは昨年12月の恵比寿の東京都写真美術館でこの映画を観て以来、9回目の鑑賞となった。薄れない感動を語り、吉増さんの詩の言葉を「巨大な隕石の言葉の世界をぐっと広げた」と表現した。

吉増さんは24日に来場。「僕は、青梅の夜具地を作っていた福生の機屋の息子で、ふっさつ子」と笑顔で話し、「今日は素晴らしい。音がやわらかくさやいているように聞こえるんだ」と、木造映画館のシネマネコでの上映を喜んだ。「僕も、福生第一国民学校(現福生市立福生第一小学校)にいた小学2年生のときに、初めて青梅で映画体験をした。青梅キネマで、まだ機敷だった。機敷の手触りを思い出しました」。

新宿ゴールデン街でバー文庫屋を営んでいた「クロちゃんこと安保(黒崎)登美子さん(後の「Nadja」のママ)を通じて交流が生まれたメカス氏との思い出を懐かしんだ。



井上春生監督(左)と井上正行さん